

「子を愛するならば…」

エペソ人への手紙 6 : 4

July.13.2025

エペソ人への手紙 6 : 4 (パウロ)

Preface

先週は、この御言葉の前半部分、「父たちよ。自分の子どもたちを怒らせてはいけません」という内容について考えていきました。

今朝は、その後半部分、「むしろ、主の教育と訓戒について育てなさい」という御言葉について考えていきたいと思っております。

第一に、この御言葉を前にして私たち大人が正直に向き合わなければならないのは、たとい、イエス・キリストを信じ神の言葉を愛しているはずのクリスチャンでさえも、子どもたちの教育をすべて世に任せてしまったという事実だと思います。

「主の教育と訓戒によって育てなさい」という子どもたちと向き合う上で最も大切な神の教えを、ただの狭い宗教教育程度に押し込んでしまい、その意味するところの深刻さや深さ、また子どもたちが人として生きていく上で、その営みのすべての領域に渡って最も大切な土台であり内容であることを私たち大人が忘れてしまったかのような、無視しているかのような、避けているかのような姿があるように見えます。

子どもたちを育てるにあたって、最も大切なことを真っ直ぐ真に受けることを辞めてしまったかのようなのです。

イエス・キリストを信じているキリスト者であっても、子どもたちをいい学校に送り、いい職場に就かせ、いい暮らしをしてもらうことしか頭の中にないのかもしれません。

もちろん、それらのことも、決してないがしろにしてはならないとても大切なことだと思います。

確かに神さまは、色々な面において私たち人間が豊かに暮らすことを願って止まない方ですし、いい学校、いい職場、いい暮らしのような面においても豊かにし、豊かに導いて下さるお方だと思います。

でも、そればかりが過ぎて、結果、この世にあって他の人たちと比較しながらより良く生き残るための方法を学ぶことしか、子どもたちに要求しなくなってしまったのではないのでしょうか。

まことの神を、主なる神を、救い主イエス様を頼る方法を一度も教えたためしがないかもしれません。

聖霊に満たされることの大切さを教えたことなんかないかもしれません。

父として、母として、大人として、そして何よりも、クリスチャンであるな

らば、これこそ、子どもたちにしてあげられる最大のプレゼント、最も大切な務めであるはずなのにです。

子どもたちが本当の意味で幸いか、幸いでないかを左右することであるにも関わらずです。

私たち大人が、子どもたちに先ず教えてあげ、決めてあげなければならないのは、「何を恐れ、誰を恐れなければならないのか」ということではないでしょうか。

人の人生は、何を、誰を、何者を、何事を恐れるのかによって、その人生の善し悪し、幸か不幸かが決まると、聖書は教えて下さいます。

ナホム書に行ってみましょうか。

Part One

ナホム書 1 : 2 - 10 (パワポ)

聖書はなぜこんなにも、神様のことを恐く、恐ろしく描写するのでしょうか。

私たちは、聖書の中に、「主は情け深く、あわれみ深く、怒るのに遅く、恵みに富んでおられ、その恵みは造られたすべてのものの上にある」という神のいつくしみ深さを表す表現が繰り返して出てくることを知っていますが、意外にも、これとは逆の神についての表現がたくさん出てくることに、聖書を読み進めて行きますと、驚きや怖さを覚えることがあります。

「神様というお方がどのようにねたみ、復讐し、憤られ、どんな罪も罰せずにおかれることはない」というような表現ですね。

そのような表現が記されている理由は、ただ一つです。

「何を恐れなければならないのか？ 誰を恐れなければならないのか？ 誰に良く見られる必要があるのか？」を、私たちに教えるためです。

こんな昔話を聞いたことがあるでしょうか？

ある山奥の田舎の村に、一組の老夫婦が住んでいました。

貧しく、一度も住んでいる村以外のところを見たこともなく行ったこともなく、土地を切り開いて、田んぼや畑を細々と耕しながら暮らしていました。

そんな二人には、年取って与えられた一人息子がいました。

村にはその子以外の子どもがいませんでしたので、一人野や山を駆け回りながら毎日遊んでいました。

するとそんな中、その男の子は一人の鬼の子に出会い、その鬼の子と友達になりました。

そしてある日、その鬼の子を家に連れてきたのです。

老夫婦は、息子が連れてきた友達が鬼の子だったのでびっくり仰天しました。

でもよく見ると、その鬼の子も可愛く、そんなに怖いような感じはありません

んでしたので、人の子一人いない村にあって、せっかく出来た友達なのだからと、そのまま鬼の子と遊ぶのを見守っていました。

ところが、日が経つにつれて、息子の行いが、鬼に似て行くようになったのです。

「こりゃ、いかん。このまま放っておくと、あの子が鬼のようになってしまふかもしれない」と心配した老夫婦は、息子に、鬼の子にこんなことを聞いてみるよう頼みました。

「坊や、坊やの友達の鬼の子に、鬼にとって一番怖いものが何なのかを聞いてもらえんじゃろうか？」

「何で？」

「坊やが鬼の子と友達だから、鬼が、何が一番怖いのかを知っておきたいんじゃないよ。」

そこで、その息子は、鬼の子と遊んでいた時に、「ねえ、君が一番怖いものって何？」と聞いてみました。

すると鬼の子は、「鬼は獣の血が一番怖いんだよ」と教えてくれました。

今度は、鬼の子がその子どもに、「人間は、何が一番怖いんだい？」と聞き返しました。

ですが、ちょっと考えてみても、怖いものが思いつかないんです。

でもずっと考えていますと、お父さんお母さんが毎晩、深いため息をつきながら、「ああ、怖い、怖い。お金ほど怖いものが、この世にあるだろうか」と嘆いているのを思い出して、「あのね。人間は、お金が一番怖いんだよ」と鬼の子に教えてあげるんです。

するとその次の日、「鬼は獣の血が怖い」ということを聞いた老夫婦は、二度と鬼の子が自分たちの子に寄り付かないように、家の周りのありとあらゆるところに、動物の血を撒いておきました。

その日、遊びに来た鬼の子はどんなに驚いたことか、「友情をこんな仇で返すとは！ 見ていろ！ 必ず復讐してやるから！」と息巻いて出て行った鬼の子は、人間が一番怖いというお金、小判をたくさん持って来て、家中に吐き散らして、「ざまあみろ！」と言って帰って行きました。

Part Two

皆さんは、何が一番怖いですか？ 私たちは、何が一番怖いでしょうか？

お金ですか？

お金でしょう。

正直に言って、神様をお金よりも恐れているならば、私たちは、私たちの子どもたちを今のように育ててはいないことでしょう。

私たちは、お金が怖い人たちです。

だから、子どもたちに勉強させて、いい学校行かせて、いい職場に就かせて、いい暮らしをさせようとしています。

もちろん、先程も言いましたように、これらのことも大事なことですし、生きていく上で大切な、ないがしろにしてはならないことだと思います。

でも、それが恐れの対象であるならば、私たちは、聖なる神の奴隷ではなく、お金の、富の、それらの奴隷となってしまう。

そして「奴隷の子は奴隷だ」と言わんばかりに、子どもたちを、お金の、富の、それらの奴隷にしてしまい兼ねません。

それらに子どもを献げてしまうんです。

旧約聖書に、まことの神を信じているはずのイスラエルの民たちが、青銅で出来た牛の頭をした偶像に、自分の子どもをいけにえとして献げてしまう残忍な愚行が記されていますが、それと同じことを私たちもしてしまっているのかもしれない。

イエス様が、唯一、人間にとってまことの神に匹敵する偶像の神として挙げているのが富であり、お金です。

天照大神とか、ゼウスの神とか、バアルの神とか、五穀豊穡の神とか、何とか菩薩とか、何とか如来とか、天皇とかという具体的な偽の神々の名前を例に挙げなされたことは一度もなく、全部それらをひとまとめにして、「富をあなたがたは神とし、富を神よりもはるかに恐れている」と仰せになったことがあります。

もし私たち大人が、神を恐れているならば、子どもたちを主の教育と訓戒によって育てることを何よりも大切に、主の教育と訓戒によって愛する子どもたちを育てるために、先ずは自分自身が主の御言葉を知らなければならないと、熱心に食べ、熱心に学び、熱心に向き合い、熱心に考え、そこから得た栄養分を何とか子どもたちに食べさせたいと料理するでしょうし、分かち合いたいと祈るでしょうし、子どもたちと御言葉をもって向き合い、語り合うことでしょう。

例えば、学校の先生から、「お宅のお子さん、ここ1週間学校に来ていないのですが、何かありましたか？」と電話が掛かって来たら、どんな反応をするでしょうか？

「いや、そんなはずありません。弁当持って、カバンもって毎日学校に行っているはずですよ」と答えながら、電話を切るや否や、「学校さぼって、どこほつつき歩いてんだ」と鬼の形相になりながら怒りが湧いて来るでしょうか、または、天地がひっくり返ったかのように心配するでしょうか。

いずれにしろ、感情がぐらぐらと揺さぶられることでしょう。

ところが、日曜日に教会学校を休んで、教会学校の先生や牧師から電話が掛かってきて、「何々ちゃん、何々君、お元気ですか。ここ最近、教会学校に来ていないので、ちょっと心配になって電話致しました」と言われたら、何と答えるのでしょうか？

「いや～すみませんね。うちの子、何か教会学校がつまんないって、行きたがらないんですよ」と、「別に教会学校行かなくてもいい学校には行けるし、いい職場にだって就けるし、いい暮らしだって出来るから大丈夫」と、特段心が痛むこともなく、余裕たっぷりの返事をするのでしょうか。

私たちは、神を恐れていないんだと思います。
世の中の方が、よっぽど怖いんだと思います。
これこそが、私たちの根本的な問題ですよ。

私たちが、子どもたちを、世の中の方がよっぽど怖いものとして育ててしまったがために、子どもたちは、父母を敬わなくなってしまったのでしょう。

神様を恐れることを教えたならば、もっと世の中、父母を、目上の人を敬うようになったはずだと思います。

私たちは、私たちの信仰をどこで失敗したのでしょうか？

どこか遠くの彼方にあるわけではなく、直ぐ近く、家庭で失敗し、教会で失敗したとしか言いようがないに思います。

Part Three

戦後80年、日本という国は、経済的に大発展を遂げてきました。

「天然資源のない国において国が発展するためには、教育がないとダメだ」と、凄まじい教育熱をもって子どもたちを教育してきました。

そして、世界有数の貧しい国から、世界有数の裕福な国へと発展を遂げました。それはそれで物凄いことだと思います。

じゃあ、日本という国は、幸せな国になったのでしょうか？

日本に住んでいる人々は、幸せでしょうか？

年間3万人近くの方々が、自らの命を断ってしまう国が、正常な幸せな国だと言えるでしょうか？

それでもなお変わらず、経済的发展ばかりに執着し、科学だ、技術だ、教養だと、そういう分野において今一度抜きんでることばかりに重きを置いている姿は、また同じことを繰り返してしまうのではないのでしょうか。

「経済的貧しさや、知的貧しさや、技術的文化的貧しさを追い求めましょう」なんてことを言いたいものではありません。

「その富、その知性、その巧みさや風俗は、何の上に立っていますか？」ということを考えています。

10年前アメリカに行った時、好きで、毎年夏に国立公園にキャンプをしに行っていました。

するとそこに、日本では見ることの出来ない程の物凄く馬鹿でかい木が立っていたのですが、森の中を歩いていますと、突然、その馬鹿でかい木が根こそぎ倒れているのを目にしました。

そして、その倒れている木の共通の特徴が、根っこが浅いということなんです。

根っこの部分を見てみますと、まあい大きな座布団のようになっていて、地面奥深くに根を張ったような痕跡は見られず、その座布団のような根っこに巨大な木が座ったまま倒れているような姿をしています。

何でそんなに根っこが浅いのかと言いますと、根を深く張らなくても、土の表面にいつも十分な水分や栄養分があるので、根を深く張る必要がないんだそうです。

しかも、太陽光豊かな強烈な日差しゆえに、旺盛な光合成をして、木はぐんぐんと伸びて行きます。

傍から見ますと、何とも言えない立派な木でしかないのですが、でもその内実は、根が弱いために、少し強めの雨風にも耐えることが出来なくて倒れてしまうんです。

私はこれを見て、日本の姿を見るようでした。

経済成長、科学技術や文化コンテンツが発展してぐんぐんと伸びて行き、世界でも指折りの国となりましたが、根があまりにも弱いんです。

まことの神にある人間性を養うことが出来ていないんです。

クリスチャンたちでさえも、子どもたちに習い事をさせ、塾に行かせ、いい学校に行かせ、いい職場に就かせ、いい暮らしをさせることにおいて熱心ではありますが、主の教育と訓戒によって育てることを怠ってきてしまいました。

それは、愛する我が子を倒してしまうことに繋がり兼ねません。

その子どもたちが、色々な発展の中に身を置いて、どのようにその富を上手に用い、上手に果たし、上手に堪え得るでしょうか。

私たちは貧しい中にあっても対処出来なければなりません、富にも、豊かさにも対処出来なければならぬでしょう。

貧しさに対処出来なければ、貧しさゆえに倒れてしまうのと同じように、富に対処出来なければ、その富ゆえに倒れてしまいます。

富が及ぼすその重圧感と高さと負担感と高揚感ゆえに、倒れてしまいます。

倒れてしまうのは、同じですね。

貧しさも私たちを倒れてしまいますが、富も私たちを倒れてしまいます。

巧みな、上手いサタンの策略ですよ。

でも根が深ければ、貧しさも私たちを倒すことは出来ず、富も私たちを倒すことは出来ません。

戦中戦後の日本は貧しさゆえに倒れましたが、近現代の日本は、あまりにも富んでいて、物質的に足りないものが無くて倒れやすい世代、時代を生きています。

幼い子どもでも自分のスマホを持っていて、それを見続け、心奪われるほど

に富んでいます。

昔の世代の方々の方が、今より倒れやすかったでしょうか？

近頃を生きる若い世代、子どもたち、孫たち世代の方が倒れやすいでしょうか？

もしかすると、今の世代、子どもたち孫たち世代の方が危ないかもしれません。

文明文化、経済、科学技術の豊かさが、私たちの子どもたちを堅固にし、たくましく立ててくれるようにはなっていない危うさを生かされています。

それらしい顔をした、まやかしだらけに囲まれて、倒れやすく、ひっくり返りやすいと思います。

神を知る、神を信じる信仰は根です。

唯一まことの神イエス・キリストを信じる信仰は、根です。

主の教育と訓戒は、私たちの暮らしの深い根です。

その自覚が、私たち大人にあるでしょうか。

もし子どもたちが貧しさに処することになったとしても、あるいは富に処することになったとしても、失敗や困難や挫折や誘惑に負けてしまったとしても、逆にありとあらゆる事に成功したとしても、それらとは関係なく、信仰の根が張っているならば、いつも神にあって立ち続け、満足出来ることでしょう。

ピリピ人への手紙4：11－13（パウロ）

この御言葉の成就が、子どもたちになってこそ、その子は、心から、たましいの奥底から幸いを覚えることが出来るでしょう。

Conclusion

英語や数学などは、学校の先生や塾の先生が教えてくれるかもしれませんが、主の教育と訓戒は、私たち大人が、教会の大人が、親が教えるのです。

主の教育と訓戒によって子どもたちを育てる責任から顔を背けず、高い授業料を払って学校や塾に送り、いい服を着せ、いい物を食べさせ、いい物を買わせながら、「私があなたをどれだけ苦労して育ててきたことか」と空虚な自慢をする代わりに、本当に涙をもって子どもたちのために祈り、主の教育と訓戒によって育てる大人であり、親でありたいと願います。

「主よ、私の力では出来ません。どうか助けて下さい。子どもたちの心にあなたが触れて下さり、掴んでいて下さい。子たちがまことの神イエス様に頼り、世に打ち勝つ力をお与え下さい」と祈ることから、先ず私たち始めて行きたいと願います。

このことのためにも、マナ愛児園は存在しています。マナのためにお祈りいただけますと幸いです。 お祈りいたします。 祝祷：エペソ6：4